

清光館跡

『遠野物語』で有名な民俗学者である『柳田國男』ゆかりの地です。



<清光館と柳田國男>

大正9年(1920年)に、東京朝日新聞社の客員となった柳田が、三陸を徒歩で北上しながら取材していたそうです。

洋野町の小子内地区に入り、ほとんど疲れた柳田が、小子内に一軒しかなかった『清光館』という小さな旅館に泊まりました。

その後、大正14年(1925年)に、八戸線が八木まで開通し、再びこの地に訪れた柳田が、記憶を頼りに清光館を訪ねるとすでに没落し建物もなくなっていました。

その光景を目の当たりにした柳田は、世の無常を『清光館哀史』(単行本『雪国の春』に収録)に書き記しました。

JR八戸線陸中八木駅から細い道を南下して行くと国道45号と合流する手前、左手に立つ石碑が目印です。

石碑には、清光館哀史の一節が刻まれています。

一度、清光館哀史を読んでから、この地を訪ねてみると、柳田國男の思いを感じることができるかもしれませんね。

津波記念碑

清光館跡地のすぐ近く(北側)に、明治と昭和に起きた三陸地震大津波の記念碑が2つ立っています。



右側の碑には、『地震があったら津波の用心』『津波が来たなら高い所へ』『あぶない所に家を建てるな』と3つの教訓が刻まれています。

左側の碑には、明治と昭和の津波それぞれの規模と犠牲者数が刻まれ、『地震長きは津波と思へ』と教訓も刻まれています。



沿岸の道を歩くと、このような石碑を見付けることができます。

普段気にせず通り過ぎているものにも色々な意味があるものです。